

令和4年度

学校推薦型選抜試験問題

地域創生学部 地域創生学科  
地域文化コース 異文化体験枠  
小論文

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2 問題冊子（10ページ）には、解答用紙（2枚）及び下書き用紙（2枚）が挟み込んであります。試験開始の合図があったら、直ちに中を確認、印刷や枚数の不備などがあった場合、監督者に申し出なさい。
- 3 問題冊子の中に挟み込んである解答用紙を取り出して、すべての解答用紙の所定欄に受験番号を記入しなさい。
- 4 解答は、すべて解答用紙の所定欄（横書き）に記入しなさい。
- 5 句読点は、一字と数えなさい。
- 6 試験室で配付された問題冊子及び下書き用紙は、退出時に持ち帰りなさい。

このページは白紙です。

このページは白紙です。

[問題] 次の課題文を読み、設問1と2に答えなさい。

【設問1】 コーヒー生産に関連して、筆者はジェンダーの視点から複数の問題を提示しています。それらの問題と筆者の考えの要点を、600字以内にまとめなさい。

【設問2】 筆者が提示した問題のうち、あなたが特に関心を持っている問題は何ですか。またその問題の解決に向けてどのようなことができるか、具体的に600字以内で述べなさい。

[課題文]

ジェンダーとは、社会的、文化的に分類される性別のことを指します。いわゆる「女性」「男性」という生物学的な性別に限られるものではなく、Lesbian（レズビアン、女性同性愛者）、Gay（ゲイ、男性同性愛者）、Bisexual（バイセクシュアル、両性愛者）、Transgender（トランスジェンダー、性別越境者）といった性的少数者（LGBT）を含むべきものです。さらに近年は、自分の性別がわからない（Questioning）など、LGBTに当てはまらない人の存在にも配慮し、LGBTではなく、LGBTQと表現すべきだという声もあります。

しかし、世界には法律的に同性婚が重罪にあたる国も数多くあることから、SDGs<sup>(注1)</sup>では、ジェンダーの平等に本来なら含まれるべきLGBTを入れることに合意できませんでした。「誰一人取り残さない」というSDGsの概念自体に当然LGBTも含まれているとする人もいますが、本来であれば、ゴール5<sup>(注2)</sup>に明記すべき問題です。人の性のあり方は様々であり、それによって差別される社会は、真に公平な社会とは言えないのです。

昨今日本でも、ジェンダーの平等や多様性を認める重要性が訴えられるようになりましたが、ジェンダーの問題は非常に複雑で、国の文化や社会構造にも深く根ざすからこそ、SDGsの多くの項目に横断的に及んでいるのです。

コーヒーは、そのほとんどが開発途上国で生産されますが、途上国の農村部における女性の労働力は大変重要で、その数は男性よりも多いことがよくあります。そこには、内戦や虐殺、HIV/AIDSの蔓延、より良い収入を求め街に出稼ぎに出るなどの理由で、農村部の男性の労働力が減ったため、結果的に女性や子どもが農業に従事することになったという事情もあります。

国際的な問題として、女性の役割の重要性が議論されるようになったのは1970年代以降のことです。1970年代には「開発と女性（Women in Development/WID）」、1980年代からは「ジェンダーと開発（Gender and Development/GAD）」という概念が提唱され、議論されてきました。

WIDが開発の中での女性の地位向上を図るというアプローチであるのに対し、GADは社会におけるジェンダーの関係を把握し、変容させようというアプローチでした。1995年に開催された第4回「世界女性会議」では、「ジェンダーの主流化 (Gender Mainstreaming)」という概念が提唱され、法律、政策、事業など、あらゆる分野のすべてのレベルでジェンダーの視点を取り入れ、ジェンダーの平等を達成すべきだと説かれています。また、農業分野においても、その成長を支えていくために必要なジェンダーの平等が議論されています。

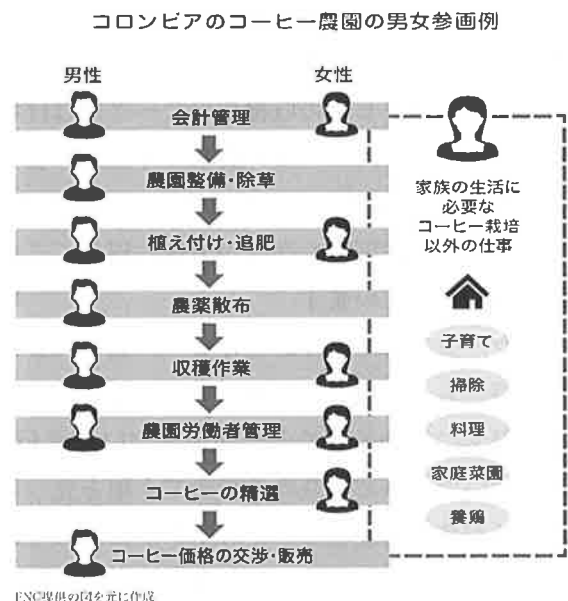
そもそも、コーヒー生産農家の仕事には、コーヒー樹の栽培から収穫、精選、出荷、販売など、多くのプロセスがあり、女性はその多くにおいて重要な役割を担ってきました。それにもかかわらず、女性がコーヒー農園で働いていても、男性と同じように経営に関わったり、組合に入り融資や技術支援を受けることが難しい地域はまだたくさんあります。

そのようなジェンダーの不平等は、女性が土地の所有権を持つことが慣習的に困難である国や地域においてはさらに顕著です。多くの国で伝統的に重んじられてきた家庭の中の女性の役割が、家事も子育ても一手に引き受けるマルチタスクであるため、男性に比べて女性は学校からも遠ざけられ、女性の貢献は正しく認識されてきませんでした。

コーヒー農家の女性も、農園での労働、家庭内での労働と、多分野の労働を担っているにもかかわらず、その貢献が社会的に認められない例が多々あります。それは、世界が抱える大きな課題であり、その流れを変えようという動きは世界中のあちこちで、そしてコーヒーの生産地でも生まれています。

右の図は、コロンビアコーヒー生産者連合会 (FNC) が示した、コロンビアのコーヒー栽培における典型的な男女参画例です。

この図には、力仕事の多い農園整備や除草、妊婦への危険が高い農薬散布は男性が受け持ち、それ以外の、会計、収穫、労働者の世話や管理などには、女性と男性の双方が関わっていることが示されています。また、コーヒーの品質にとっても大きな影響を与える精選作業は女性が受け持つ一方で、その品質が反映される価格交渉や販売の多くを男性が受け持っていることも示されています。



コーヒー栽培農家と言っても、コーヒーだけを育てていれば生活できるわけではありません。その多くは、家庭で消費するための家庭菜園や養鶏も行い、また料理や掃除などの家事全般や子育てもしなければなりません。

そしてこれらを一手に引き受けているのは女性です。しかも、一家の面倒を見る家事には、1年中休みがありません。

また、女性の労働時間はとても長いにもかかわらず、コーヒーの価格交渉や販売には関わらないため、収入へのアクセスは男性に限られています。自分の労働対価としての収入がなければ、たとえ女性が家族の食料や衣類などのためにお金が必要であっても、男性からお金をもらうしかないことになります。女性の労働が無償労働という扱いを受け、生活に必要なお金ですら男性から貰<sup>もら</sup>わなければならないと、金銭的にも精神的にも男性に依存する関係は解消されず、女性自身も「自分は男性に依存しなければ生きられない存在なのだ」と認識してしまいがちです。

このようなジェンダー配分の明らかな不均衡は世界各地で見られ、そして多くのコーヒー生産国には古くから根付く男尊女卑の文化や、女性と男性の役割に関する固定観念があります。

例えば、アフリカのウガンダでも、女性は農園で働いているにもかかわらず、コーヒーの販売で収入を得るのはほぼ男性だけに限られています。これは、ウガンダでは伝統的に女性に土地所有権が認められてこなかったことも大きな原因です。

ウガンダの生産者グループを対象に行われたある調査では、コーヒーは男性が所有権を持つ土地で穫<sup>と</sup>れる作物なので、「男性の作物」だという考えが根強いことが、女性、男性の双方へのインタビューからわかっています。女性や子どもたちは、コーヒー農園で働いても、コーヒーの販売に関わらないため、自分たちのコーヒーの販売価格を知らないケースさえあったと言います。

しかも、コーヒーの収穫期のピークにおける男性の1日の平均労働時間は8時間であるにもかかわらず、コーヒー農園での仕事に加えて家事を一手に引き受ける女性の労働時間の平均は、15時間にのぼりました。女性が男性からドメスティック・バイオレンスを受けたり、家計に困った女性が男性に隠れてこっそりコーヒーを売って収入を得るという事例も報告されています。

また、夫である男性が亡くなり、遺言によって妻である女性が土地を管理することになった場合も、周囲に「土地は男性のもの」という固定観念が根強く残るため、コーヒー農園の経営に関わる女性が周囲から陰口を言われ、傷ついているという訴えもありました。そのせいでコーヒー栽培を諦めて土地を売ったり、息子の成長を待って土地を譲渡している女性が多く存在することも明らかになっています。

女性を支える社会基盤の脆弱<sup>ぜいじゃく</sup>さは、女性の進出を妨げる直接的な要因になっていますが、仮にそのような点が改善されたとしても、社会での女性の役割についての固定観念が

強いと、女性は無意識のうちに諦めてしまうこともあります。これは、途上国の女性に限った問題ではなく、日本で女性の管理職や、政界での活躍が極めて少ないのは、ジェンダーの平等が根本的に社会に浸透していないからとも言われます。

この調査が行われたウガンダの生産者グループの一部は、フェアトレード認証<sup>(注3)</sup>を獲得しており、調査結果を受けて、ジェンダーの平等に向けた様々なワークショップが行われました。

ただし、ジェンダーの平等のためには、女性のエンパワーメント<sup>(注4)</sup>のみをすればよいのではなく、男性にも女性の役割や、女性に対する不平等な扱いと男女の固定的な役割分担がもたらす結果について、共に考える機会が必要です。このプロセスは、古くから伝わってきた男尊女卑の観念への介入となるため、注意深く行う必要があります。

多くのコーヒー生産国において、コーヒー栽培は小規模農家の重要な収入源であるからこそ、コーヒーのバリューチェーン<sup>(注5)</sup>において女性の役割を明確にし、コーヒーによる収益から女性が男性と対等な対価を得るような仕組みを作り上げることが必要なのです。そのような意識改革が進み、女性がさらにコーヒー栽培に興味を持てば、結果的にコーヒーの品質や収穫量も改善されていくはずです。

先に挙げたFNCは2013年に、コロンビアのコーヒー生産者に残るジェンダー不平等を農協と協力して改善するために、「ジェンダー平等プログラム」をスタートさせました。2019年8月の時点で約800名がこのプログラムに参加しています。

参加者のうち約70%は既婚女性で、残りの約30%には離婚経験者や寡婦<sup>かふ</sup>が含まれます。既婚女性の家庭ではかつて、意思決定権は完全に男性にありました。

男性優位社会であるコロンビアでは、女性はコーヒー生産に参加していてもビジネスや販売に関わることができず、様々な農園での仕事に加え家事もこなしていても、完全に無給であるのが当たり前でした。

また、家庭内でお金を握る男性は、飲酒など自分だけの目的に収入を使いがちで、家族の生活費を使い込んでしまうことも多々あります。

このような社会構造は、男性による女性へのドメスティック・バイオレンスや、男性が亡くなってしまうと家族の生計が立ちいかなくなるという事態にもつながっていたのです。

そこでFNCは、より健全な家族経営によるコーヒー生産を普及させるために、このプログラムを開始し、家庭内での女性の地位向上と、女性への品質管理指導や女性がマーケティングに関わるための支援を行いました。

女性が販売に関わりを持つようになったことで、コーヒーの品質は格段に向上しました。品質が良ければ高く売れることがわかると、より収入を得るために完熟豆を選んで収穫し、誰もが丁寧な精選をするようになりました。

その結果、このプログラムのコーヒーは高い評価を受けるようになりました。また、プログラムに参加する女性たちの強い団結力で情報交換が密になったことや、女性は利益のほぼすべてを進んで設備や将来に投資したこともプログラムの成功を後押ししたのです。

さらに女性は、自らの収入を家族のために使うことが多いため、世帯全体の生活の質が上がったとの報告も出ています。また女性がコーヒービジネスに積極的に参加することで、子どもたちや若年層がコーヒー生産に興味を持つようになり、後継者育成にも大きく貢献しているとも言われています。

特にウイラ県は、FNCと地元の農協が協力体制で「ジェンダー平等プログラム」を立ち上げた場所でもあり、コロンビアの中でも特に女性グループの活動が盛んな地域で、県内7つの自治体が参加しています。

2019年8月初旬に、筆者の山下が現地を訪問した際は、農協の買い付け価格の表にはプログラムに参加した女性グループのコーヒーがあり、品質第一で決定される買い付け価格が他の認証コーヒーより高いという成果も上げていました。農協は、女性グループのコーヒーを「女性生産者のコーヒー (Mujeres Cafeteras)」と名付け、特別なパッケージで販売しています。

また、このプログラムでは、米国の非営利団体であるサステイナブル・グローワーズが開発した「プレミアム・シェアリング・リワード (Premium Sharing Rewards)」の手法も採用しています。

この手法はもともと2010年にルワンダの女性コーヒー生産者を支援するために開始されたプログラムだったのですが、ルワンダとコロンビアではコーヒーの生産方法や国内事情が異なるため、コロンビアでは女性たちに4段階(1.排水処理, 2.土壌分析と追肥, 3.品質管理指導, 4.小型焙煎機ばいせんの導入)のトレーニングを実施し、終了時に小型焙煎機が付与される仕組みを導入しました。

2019年8月の時点では、ウイラ県の農協の女性のうち、429人がプログラムに参加していました。プログラムでは、近隣の大学と連携したビジネストレーニングも実施し、子どもたちの参加も可能にすることで、世帯全員が関われるようにしています。コロンビアでは農家の平均年齢が60-65歳と高齢化が進んでいるため、若年層がコーヒー生産から離れていくのを防ぐことはとても大切なのです。

地域ごとにいる14名の女性リーダーたちに、プログラムに参加して何が変わったかを述べてもらったところ、次の結果が得られました。

- 自分たちのコーヒーに対する知識や技術が向上した 14名
- コーヒーの品質が向上した 9名
- 生活の水準が向上した 8名
- 子どもの教育への支援を受けることができた 4名
- 家庭内での自分たちの地位が向上した 14名



また、グループに参加する前と後の家庭での自分の役割を比べてもらったところ、  
「以前は、農園で働いていても、コーヒーに興味がなかったが、トレーニングを受けて、  
いろいろな視点で見られるようになった」

「以前は、自分はただの主婦だと思い込んでいたが、今ではコーヒー生産が家族経営に変わ  
り、自分も関わっていると言える」

などの声が多数あがり、女性たちの意識が大きく目覚めたことがうかがえました。

農協の職員によれば、このプログラムが開始された当初は、男性が反発し、女性を集める  
ことすら難しい状況だったそうです。そのため、男性もプログラムに参加してもらい、  
家族でトレーニングを実施し、世帯の収入が増える利点を理解してもらうことから始めた  
と言います。

その結果、家族内で協調性も生まれ、子どもたちのコーヒー生産に対する知識も深まり  
ました。今では男性から女性にプログラムに参加を促すケースも珍しくなくなったという  
報告もあります。

ジェンダーに関わる課題は国の文化や慣習にも深く関わるため、同じ手法がどこでも通  
用するとは限りません。しかし、他の国での事例を参考に、各国が工夫を凝らし、自国の  
改善に向けた対策を取ることができるところに、世界的な取り組みであるSDGsの意義は  
あります。

2020年、世界各国のジェンダーの平等を示す一つの指数である「ジェンダー・ギャッ  
プ指数」で、日本は世界153カ国中121位でした。これは、先進国の中では最低レベルで  
あり、開発途上国である多くのコーヒー生産国さえ下回ります。日本は初等教育や識字率  
などの教育や保健の分野でのジェンダーギャップがなく、その意味においては世界トップ  
レベルの男女平等な社会基盤が築かれているにもかかわらず、政治や経済の分野における  
女性の活躍が著しく低いことが順位を押し下げる要因となっています。

人口減少と高齢化が進む中、女性が社会で活躍しにくい日本の現状は大変危機的です。  
働き手としての女性の雇用促進を進めるだけでなく、周囲や社会が女性の役割や可能性  
に理解を示し、変わっていかねばいけない点は、コーヒー生産地の問題と同じです。

日本ではジェンダーギャップへの配慮を付加価値とするコーヒーの流通は、ほとんど見  
かけないのが現状ですが、SDGsを通じ、自国への啓発も含めて取り組むべき課題と言  
えるのではないのでしょうか？ もし実現すれば、生産国と消費国のジェンダーの課題を、  
コーヒーでつなぐことができるかもしれません。

(José. 川島良彰ほか『コーヒーで読み解くSDGs』ポプラ社 2021年 一部改変)

(注1) SDGs

Sustainable Development Goals の略。日本語では「持続可能な開発目標」と訳されているように、SDGs は「持続可能な開発」を達成するための目標を具体的に示したものである。

(注2) ゴール5

17 ある SDGs のゴールの一つ。Achieve gender equality and empower all women and girls (ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児の能力強化を行う)

(注3) フェアトレード認証

フェアトレード商品の世界的な普及を後押しするために、国際フェアトレードラベル機構が「経済的基準」「環境的基準」「社会的基準」の3基準を満たしているかどうかを点検し、輸出入業者、加工・製造業者、販売業者までの全過程で点検して、認証している。

(注4) エンパワメント

権限、能力を与えること。

(注5) バリューチェーン

製品やサービスが消費者に届くまでの流れにおいて、モノやサービスにどのように価値が加わっているかに着眼し、価値の生み出し方を見直す経営手法。